

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(30)〉

「総合的保育者」養成を支える「人」と「場」

浜口順子

プロジェクトの目指してきたもの

お茶の水女子大学における「幼・保・大連携プロジェクト」(二〇〇六年度から進行中)で取り組んでいる多様な活動や研究について、二〇〇七年の一月号から二年半にわたり、毎号この場をお借りして報告してきました。その内容は整理すると、だいたいのようになりまます(かっこ内の数字は掲載回数で、同じ著者による連載は一として算定しました)。

- ・ 海外の保育視察報告 (五)
- ・ 保育現場からの報告 (四)
- ・ 国内の保育視察報告 (三)
- ・ ナーサリーと大学の共同研究 (三)
- ・ 二歳児の発達研究 (二)
- ・ 授業実践の報告・考察 (二)
- ・ 外部講師による授業の評価・考察 (二)
- ・ カリキュラム改革 (二)
- ・ 外国の保育動向 (二)

掲載回数からすると、海外・国内の視察に特に力を入れていられるように思われるかもしれませんが、そういうわけではありません。むしろ主眼は、授業・カリキュラム研究にあり、私たち保育・児童学系教員が教職課程（幼小、中高の家庭科）の先生方や保育現場（附属二園、養護学校、学童クラブ、公立幼稚園など）の保育者との連携を図りつつ、授業（講義・演習・実習）の内容や成果を確認しあい、いろいろな授業方法を試みてきています。

このプロジェクトは「総合的保育者」、つまり職業的な保育者だけでなく、世の中の「子育て支援」を家庭もしくは社会の両面から支える担い手を育成することを目指しています。そのためには、「人を育てること」「子どもという存在」にセンシティブな感性と知性を育てる必要があると考えています。

こうした目標を実現しようとするうちに、前に示したような多様な活動・研究種目が、必然的に求められ

るようになり、当初の計画を増幅させながら現在に至っています。今回の報告は、このプロジェクトの構造とダイナミクスを生み出している「人」と「場」に焦点を当てて考えてみようと思います。

「人」がつくる授業

「幼・保・大連携プロジェクト」を主に担う大学のスタッフは、保育・幼児教育系の教員五名（人間生活学科、チャイルド・ケア・アンド・エデュケーション講座）と、教育研究特設センターに配属されたプロジェクト専任講師三名です。このプロジェクトは、国立大学法人化に伴い導入された、特別教育研究経費補助を受けていますが、同じ経費補助を受けているほかのプロジェクトに比べて「人」への比重がかなり大きいのが特徴です。高額の実験施設を購入するのでもなく、研究拠点開発系プロジェクトのような大掛かりなイベントを開催する必要も低いものですから、予算規模

が相対的に小さい中で、「人」をいろいろな形で必要とする割合が大きいのです。

日本では昨今、効率化、合理化などの経営戦略を、教育・福祉の分野にまで適用する傾向が顕著ですが、大学経営もその流れに抗しきれない事態になっていきます。しかし、この連携プロジェクトは、その中にあって「教育には人手が欠かせない」ということを歴然と示す結果になっています。

なぜ多くの人を必要とするのでしょうか。第一に、幼児教育学、発達心理学、人間行動学、教育社会学などの「枠組みの専門領域」と、保育学、保育史、保育文化論、乳児保育論、保育観察法、保育実践論等の「内包的な領域」をゆるやかに分担しあう人たちが必要だということ。

また、講義や演習を企画・実施する上で、「一（教員）対多（学生）」という形式をとらない授業を企画していることがあります。複数の教員が同時にかかわ

り、場所も室内だけでなくキャンパス内の空き地や外部の施設に出て、体験的共同的学びを目指そうとすると「人」が必要になります。ただ人数が必要という意味ではありません。訪問先との打ち合わせや話し合い、学生との連絡、授業後の対話的なフィードバックなどを潤滑に進め、教員相互の学生理解や授業評価をつき合わせて話し合うには、配慮ある「人」の働き合いが不可欠なのです。その結果、教員同士で授業の省察をし、次のステップへの検討をするプロセスで、「学びの履歴」としてのカリキュラムが生成されていくのです。

実習関連の授業（一年次の養護学校、障がい児の学童クラブでの実習、二年次後期の二附属園と公立幼稚園・保育所、私立幼稚園における観察、三年次のインターンシップ、四年次の教育実習）でも、実習先の選定・交渉、打ち合わせ、教員の付き添い、事後のフィードバックや個別的な課題への対応など、さまざまな場面への対応で「人」がとても重要です。

大学らしくない教育？

授業をいわゆる参加型対話型にすることは、近代の
大学教育がよしとしてきた、教壇からの一方的で権威
主義的な教授法への一つの批判的な在り方であること
は確かです。しかし、このプロジェクトがそれを最初
から意図したわけではありません。私たちが目指して
いたのはむしろ、保育における大人と子どもの関係性
を、大学教育の中に包含させることでした。受容され
ている感覚をもちながら、自らの興味・関心を見出し
つつ育ち育てられる……という保育的關係における
「育ち」の特質を、今の学生たちに自ら体験してほし
いという願いがまずありました。

授業の特質は次のようなものになります。

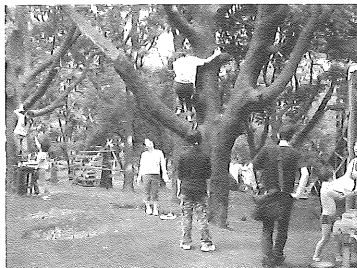
【形式】複数の教員と、マイクを使用しなくても対話
しあえる程度の人数の学生が出会い、対話的に、また

「座学」にとどまらない、身体性に訴える経験の機会
を留意します（写真1、2）。

【方法】テーマとなる問題を扱う際、その内容自体と
それが問題となるのはなぜか、というメタ的な視点と
を、同時に考えていけるような授業構成を意識してい
ます。一定の知識を示す場合もありますが、その知識
が含む日常的観念や、常識的な判断基準への問いを発
すること、またそれに基づいて自己省察することが重
要だと考えます。



▲写真1：たき火でパンを焼く



▲写真2：木登り

【構造】各授業は半年か通年続きますが、その内容構成は「基礎から応用へ」のボトムアップ式ではなく、授業の目的の周辺をらせん状に行きつ戻りつするつながら（シークエンス）を形成します。各授業の結論は教員が提示するのではなく、学生一人一人が見出すことができるようにオープンにしておきます。教員は、学生の発言や感想記録などによって、各学生の思いや学びをできるだけくみ取り、ほかの学生にも共有してもらいながら、また別のテーマにリンクさせていけるような授業の組み立てを図ります。

このような授業ですから学期末の形式的評価が難しい面もありますが、授業を起点とした教員と学生の相互的省察の一プロセスととらえ、学生の次のステップへの足がかりとなるよう配慮しています。

保育・幼児教育の授業を受講する学生の中には、発達にかかわる臨床相談員を目指す人が多くいます。保育においても臨床の場においても「受容される経験」

はその根幹となるものですが、お茶大生の中に、高校までの学校生活の中で（あるいは家庭においても）、この経験が不十分なのではないかという印象をもつ学生が少なくありません。「受容」や「ラポール（臨床の前提となる信頼と安心のある関係）」の意義を、頭だけで考えて、乳幼児期や相談者（クライアント）にだけ特別に必要なものと勘違いしているのではないかという危惧を抱きます。ですからいっそう、大学の授業においても高等教育機関なりの「保育的關係」を実現することは可能であることを示し、受容されながら育つという実感を、学生がその年齢なりに身をもって体験してもらいたいと考えています。

「場」が人を育てる

教員の個人研究室が居並ぶ中にある「保育資料室」は、私たちプロジェクト担当者のいわば「たまり場」になっています。授業や諸活動の打ち合わせや準備、

講師それぞれの担当する自主ゼミをしたり、院生がゼミの予習をしていたりもするので、「誰か」がいることが多いのです。「誰か」いるだろうからアポイントなしでいつでも立ち寄ってくれてOK、と言える場所で、授業の後などに話し足りない学生には「ちょっと来て一緒に話そう」と誘うのもここです。

私たちは定期的な会合として、半フォーマルな月例会のほか、週一度の昼休み、附属園の先生や非常勤の先生にも、時間が許せば立ち寄って雑談をしていただけるような「サロン」をもっています。

この「雑談」という行為には意外な効用があり、情報交換、連帯感の形成などに加えて、思いがけない発想を生むことが少なくありません。また、先に紹介したような授業をしていますと、ハプニングや予定変更を余儀なくされることが多いのですが、そのような偶然的な事象に対して、柔軟に、しかもポジティブな姿勢で対応しようというチームワークが、この雑談する

「場」で自然に形成されてきたと言えそうです。

「授業の合い間」というすき間の時間に、間隙的な空間（たまり場）が生まれ、一つの教育の場が生成されつつあるように思われます。こうした、偶然性を享受して喜びに変えるような教育的在り方は、ジェンダー論的に言えば、「計画性」の対岸にある、女性的特質を表していると言えるでしょう。その意味で、ネル・ノディングズの「ケア」する人としての教師論は、女子大学という高等教育機関におけるケアリングと教育の関係を今後研究する上で、詳細に検討したいと思えます。学生総数三千余名の本学での教育実践を展望するとき、ノディングズの「連鎖的な関係や同心円的な関係を形成するには、小規模な学校を考察しておく必要がある^{*}」という言葉に励まされる思いがします。

（お茶の水女子大学大学院）

※ネル・ノディングズ著『ケアリング』晃洋書房、一九九七年

（二七八ページ）